

二つのヘレネー像の間

下 島 連

一

スパルタのヘレネーと呼ぶべきか。トロイアのヘレネーと呼ぶべきか。

当時であつてギリシア世界第一の美女と謳われていたスパルタの王妃ヘレネーの、トロイアの王子パリスによる誘惑と掠奪がトロイア戦争の原因であつた。すべてが散文的なわれわれの時代には物質的利得、すなわち領土や資源の争奪といったことが戦争の原因になっているようだが、美女の争奪が戦争の動機となりえた世界は、われわれから見ると、いかにも古代的でおもしろい。九年におよぶトロイア戦争の結果、ヘレスポントのアシア側に古くから栄えていたトロイアは亡び、勝利を収めたヨーロッパ・ギリシア側も数知れない男たちを失つて深いいたでをこうむつた。

(ついでながらトロイアが実在したことはシュリーマンによるその遺跡の発掘によつて証明された。岩波文庫に収められているシュリーマンの自伝「古代への情熱」を、ことのついでながら若い人々に強く推奨しておきたい。)

たぐいまれな美女に生れたことはヘレネーにとつて祝福であつたか、それとも災であつたか。禍福はコインの表裏であるといふことはつねに人事を支配する真実であるらしい。ヘレネーは美女に生れたことの栄光を感じたことがあ

ったが、そのために身のおきどころもないような苦しみを課せられたこともたしかだ。すなわち、全ギリシアから集まる数えきれないほどの求婚者に取りまかれていた日が彼女の栄光の日であり、トロイア戦争の戦中ならびに戦後は彼女の苦しみの日であった。

周知のようにホメロスの「イリアス」はこの戦いに材をとった叙事詩であるからヘレネーが姿を現わすのは当然だ。またヘロドトス第一巻にもはるかなる古代のできごととしてトロイア戦争やヘレネーのことが記されている。しかし、なんといいてもわれわれが度々ヘレネーに出合うのは、もしくはヘレネーが作中人物によってくり返し論評されるのはエウリピデスの作品においてである。

三大悲劇作家のうち、おかれて現われたエウリピデス（前四八四―四〇七）はスーダの「レキシコン」によれば、六十六篇の作品を発表したとのことであるが、うち十七編がほぼ完全な形で今日に伝えられている。同じくスーダの推計によると、アイスキュロス（前五二五―四五六）は九十篇を発表、うち七篇が現存し、ソポクレス（前四九六―四〇六）は百二十篇を発表、うち七篇が残っている。

傑作だけが残っているという保証はないが、われわれの手許に残されている作品には悲壮美と迫力にあふれる名作が多く、それだけに失われた多数の作品のなかにどのような逸品が含まれていたかを想像するだけでも楽しい。それは大理石のかけらから元の完全なギリシア彫刻を想像する作業に似ているかもしれない。大多数の作品が失われてしまったことは惜しみて余りあることではあるが、三大作家による作品三十一篇が奇蹟的に残っているだけでもありがたいと思わざるをえない。二千数百年前にパピルスに記録されたものの一部が転写に転写を重ねて、ともかく立派に残っているということは、やはり奇蹟的と言ってもさしつかえない慶事であろう。それに三十一篇という数は、私の

ような者にはありがたい。というのは、ギリシア文学の専門家でもない私にとって、全作品が残ったとして、その二百七十余篇を読むことは量的に容易なわざではないが、それぞれの作品が長さにおいてシェイクスピア劇の半分に足りない三十一篇を読むことはさして難事ではないからである。(ことわっておくが、私はギリシア語は読めないので、英訳、日本語訳で読んでいる。)

残存している作品のみについて言うと、エウリピデスの作品には女性を扱っているものが甚だ多い。すなわち、「ヘカベ」、「アンドロマケ」、「トロイアの女」、「ヘレネー」、「メディア」、「エレクトラ」、「タウリケのイピゲネイア」、「アウリスのイピゲネイア」、「フェニキアの女たち」、「バッコスの信女」、「アルケステイス」、「救いを求める女たち」。十七篇中、実に十二篇が女性を看板にしている。したがって「エウリピデスにおける女性」ないし「ギリシア劇に現われる女性」といったものを書くことも十分に可能であるが、ここで問題にしたいのは、ホメロスに描かれている「ヘレネーとエウリピデスの作品に現われるヘレネーもしくはエウリピデスの作品のなかで他の登場人物によって描き出されているヘレネーの大きな違いである。この違いは一体どこから来ているのか。このことを明らかにするのが拙稿の主な目的である。

歴史的トロイア戦争は前十三世紀に起こったが、ホメロスの「イリアス」、「オデュッセイア」は前八世紀に今日見られるような形に仕上げられたと考えられている。そして美術史の上でアルカイック期(古拙期)と呼ばれる紀元前六世紀以前には、ホメロスによって描かれている神々の世界や神々による人間事象への干渉は、当時の人々によって、そのまま素朴に信じられていたように思われる。

ところが、アテナイ文化の全盛期(古典期)の到来と共に事情は一変した。たとえば「狂えるヘラクレス」の結末

の部分で、「神々も互いに相争い、罪を犯すことがある。神々はこのような誤りを犯すにもかかわらず依然としてオリュンポスにその座を占めておられる」と、エウリピデスはテセウスに言わしている。このテセウスの言葉に対して、ヘラクレスは言い放つ。「神々がよこしまな交りを許し、互いに自由を奪ったり奪われたりするとは信じがたい。もし真の神であるならば完全無欠であるはず。そのようないい加減な神々は詩人どもの根も葉もない作りごとである。」互いに相争って罪を犯したり犯されたりしている神々は、真の神々として認めることはできないと言わんばかりである。そして、この場合、ヘラクレスを絶望から救ったのは、デウス・エクス・マキナ（機械仕掛けの神）ではなくて人間テセウスの友情であった。それは神々の時代が去って人間の時代が到来したことを示唆しないであろうか。

ホメロスに描かれているヘレネーと、エウリピデスの作品に現われるヘレネーとの大きな違いは、このことに関連がある。それはまた、アイスキュロスとエウリピデスの違いにも現われていて、三大悲劇作家のうち最も早く現われたアイスキュロスは深くホメロスの世界を信じていたが、エウリピデスはそうではなかった。この変化はこの上もなく重要だ。くり返して問うが、紀元前五〇〇年以前のいわゆる古拙期とアテナイ文化の古典期の開始の間に、一体なにが起こったのであろうか。

私はその答えを、アカイメネス朝ペルシアの再度にわたるヨーロッパ・ギリシアへの侵入と、アテナイによるその撃退およびその後起こったことのなかに見出す。

二

久しきにわたるペルシアとギリシアの対立抗争——ヘロドトスはそれをアジアとヨーロッパの抗争としてとらえ、

これをもって彼の「歴史」の主題としている——ことに、その最終局面である前四九〇年のマラトンの戦鬪の勝利、前四八〇年のサラミス湾の海戦の勝利こそギリシア史最大の分水嶺となった。

余計なことのようにあるが、戦争というものに対する見方について一言しておきたい。現代日本の文化的風潮は戦鬪的に戦争を忌みきらう。そのことはさしつかえないが、そのために史上の戦争に対する理解や洞察力を欠くようになる恐れがあることは問題だ。いや、それは現代の戦争に対しても同じだ。

「奇蹟的な勝利——ヘラス人を恐るべき死のあざとから救い出した奇蹟的勝利の感激の結果、彼らはかつて見られなかった繁栄を実現した。この創造精神の開花は春の花のように短命ではあったが、そのみごとに業績はヘラス人はもとより後世のための永遠の財宝となった。」

と、アーノルド・トインビーはわがことのような感激をこめて語っている。彼もまたその教養においてヘレニック文明の子であることを自認しているからであろう。(「ヘレニズム・一つの文明の歴史」第六章「東方からのペルシアの侵入という挑戦に対する応戦」)

「短命であった」という形容詞に注意してほしい。よきことの永続を願うのは人情のつねではあるが、よきものはつねに短命であるということを私も近頃ようやく納得するようになった。

かねてアジア・ギリシアの都市国家の反乱になやまされていたペルシアのダレイオスは一挙にギリシア人の本拠であるヨーロッパ・ギリシアの盟主アテナイを屈服させんと、前四九〇年九月、十万になんんとする大軍——広大なペルシア帝国の各地から集めた雑軍——をダルダネルス海峡(当時のヘレスポント)の彼方に送り、アテナイ北方二十一マイルのマラトン沖で上陸の時期をうかがっていた。これを迎え討つは名将ミルティアデス率いるところの一

万のホプリテス（矛と楯とを持った古代ギリシアの歩兵）。スパルタは兵を送ることを約したが、この戦闘に間に合わず、プラタエアを除く他のギリシアの都市国家は、すべてペルシア軍の強大さに恐れをなしてアテナイを援けようとした。か。

アテナイあやうし！ ペルシア軍を先導するのはその暴政ゆえに先年アテナイから追われたばかりのヒピアス。彼はペルシア宮廷に身をよせ、アテナイを破った暁にはペルシアの手先きとしてアテナイの支配者になる計画だった。個人的利得のために祖国を売ることのような売国奴の存在は今も昔も変わることがないらしい。ともかく、ヒピアスの存在はアテナイ軍の志気をいやが上にも高めるのに役立つだけだったという。

この戦いに臨んでアテナイの市民兵は各人が国家の栄光と運命がこの一戦にかかっていることを自覚し、その悲壮な志気は専制君主の傭兵や奴隷集団の比ではなかった。要するに、すぐれた指揮官に率いられる精鋭が寡兵よく大軍を撃破した例は戦史にまれではなく、このときもアテナイ軍は地形を利用して敵の上方で圧倒的に優勢な敵に側面や背後にまわることを許さない地点を選び、整然たる密集隊伍を形成してペルシア軍に対抗して一歩も退かず、犠牲をものともせず、勇戦して敵を海に追い落とすことに成功した。

私はヘロドトス第六巻に基づいてここを書いているわけだが、オリンピック競技の花と言われるマラソン競技が、この戦いの勝利を一刻も早く同胞に報告するために二十一マイルの距離をアテナイに走った若き戦士に発していることとは余りにも有名。

この戦勝の知らせを聞いたときのアテナイ市民のよろこびは察するに難くない。それはスペインの無敵艦隊を撃破したとの知らせにわいたロンドン市民のよろこびやバルティック艦隊をせん滅した世代の日本人の熱いよろこびと比

較すべきものである。私は歴史から感激を奪ったいわゆる科学的歴史なるものを憎み、かつ軽蔑する。実にそれは人生そのものから感動——よろこびと悲しみ——を奪う甚だ貧血症の人生態度であると思うからである。

しかし、マラトンの勝利によって東方からの脅威が去ったのではなかった。ダレイオスは紀元前四八六年に死んだが、その子クセルクセスは父の遺志をつぎ、紀元前四八〇年に陸海あわせて十万を越える大軍を率いてヘレスポントを渡ってヨーロッパ・ギリシアを襲った。この遠征に際して、大軍を送るために彼が海峡に船をつないで橋としたことを、当時のギリシア人はこの専制君主の海神を恐れない大胆不敵な傲慢の行為として回顧している（アイスキュロス作「ペルシア人」参照）。

マラトンの後もアテナイはヘラスの中心勢力として来るべきペルシアとの決戦に備えた。幸運にも、この頃アッテイカ地方のラウリウムに優秀な銀鉱が発見された。そのとき、アテナイの政治家テミストクレスはこの思いがけない授かりものをボーナスとして市民に分け与えるという従来からの慣行を破って、この銀を海軍力を充実するための資金にあてることにきめた。そして、アテナイのこの海軍がペルシアとの決戦に際して決定的な役割を果たすことになるのだった。民主政治が市民にこび、市民のわがままがまかり通る衆愚政治に墮するのを救い、ひいては国家を救った指導者の責任感と先見性の好例として西欧ではテミストクレスのこの決断が古来称讃されてきた。

紀元前四八〇年の侵入に際して陸路を進んだペルシア軍の一隊は、有名なテルモピュライの險路で、スパルタ王レオニダスと三百名のスパルタ兵の決死の奮戦によって一時的に前進を阻まれたが、レオニダスと三百名のスパルタ兵の死は戦局の大勢を動かすものではなく、ペルシアの陸兵は北方からアッテイカを襲った。しかし、やはりスパルタ兵の壮烈な死は二つの意味で重要であった。第一にそれはスパルタ兵の無類の勇名を永く歴史の上にとどめたこと、

第二にそれはヨーロッパ・ギリシアの強国であるスパルタがヘラス世界の危機に際してアテナイと並んで侵入するペルシアに当たったことの象徴として。ただし、このとき三百名のスパルタ兵の全員がレオニダムスと共に戦死したのではなく、たまたまその日故障のために戦闘に参加することができなかった二名の兵士があつた。この兩名はやがてスパルタに帰った。そして生きて帰ったということで彼らはひどい迫害を受けて自殺に追い込まれた。ヘロドトスはこのようなことまで記録しているのである。

ペルシア軍の北方からの侵入が近づくや、テミストクレスはアテナイを放棄し、全市民をサラミス島に避難させた。徹底した焼土作戦というべきである。ペルシア軍はアテナイを占領し、神殿その他めばしい建造物をことごとく破壊した。しかし、アテナイ海軍はすぐれた機動力とテミストクレスの炯眼によってサラミス湾で数倍するペルシア海軍を破った。そして海からの援護を失ったペルシアの陸兵はアッティカから撤収し、ヘレスポントのアジア側に後退せざるをえなかつた。

アイスキュロスはマラトンの戦いとサラミス湾の海戦に参加したことを誇りとし、その作品「ペルシア人」のなかのサラミス海戦の報告は臨場感あふれるものである。ヘロドトスも第八巻においてこの海戦を記録しているが、戦況の描写は兩人ともよく似ている。すなわち、テミストクレスは船の数の多い敵と広い海上で戦うことの不利を察知し、敵をサラミス湾の狭い海域にさそつた。そのためペルシア艦船は活動の自由を失い、船と船が押し合つたり、衝突したりして転覆し、こうして殆ど戦わずして自滅することとなつた。

トインビーは「恐るべき死のあざとから彼らを救い出した奇蹟的勝利」と述べているが、この両度の襲来こそ彼のいわゆる「挑戦」であり、彼が「歴史の研究」第二章で「打撃の刺戟」という題目のもとで多くの実例をあげて説明

しているケースの一つと見ることもできる。大敵を向うにまわして楽勝したのではなく、全力をふりしぼっての苦戦の末に勝ったところに意味があるのである。アテナイを放棄して全市民をサラミス島に避難させるといふ思い切った焼土戦術は、死中に活を求めて成功した好例といわなければならぬ。

三

ペルシアとの戦いが終わったとき、アテナイは文字通り瓦礫の街と化していたが、強敵ペルシアとの戦いに際してアテナイが演じた中心的な役割によって、ヘラス世界におけるアテナイの指導的地位は不動のものになった。それにダレイオスとクセルクセスの野望をくじき、ボスポロス海峡の東、黒海沿岸との交易路の安全を確保したことは大きい。それはヘラス世界の一時的平和と相まってアテナイに空前の速さの経済成長をもたらした。

アテナイの伝説的国王テセウスがたとえばソポクレスの「コロノスのオイディプス王」やエウリピデスの「狂えるヘラクレス」の結末で寛大な保護者、調停者の役割を演じるのは対ペルシア戦争後のアテナイの指導的地位を反映しているのだと考えることができる。またエウリピデスの「アウリスのイビゲネイア」に見られるイビゲネイアの高貴な愛国心のなかにペルシアとの戦いの勝利によって高められたアテナイ市民の愛国心の反映を見る。現在の風潮を過去に投影することはよくあることで、たとえばシェイクスピアは「リチャード二世」のなかで、いまわのきわのジョン・オブ・ゴントに愛国の至情を吐露させているが、それはスペインの無敵艦隊を破って高揚されたエリザベス時代の、すなわちシェイクスピアの時代のイギリス国民の愛国心を過去に投影したものであると言われている。

ペルシアとの戦争でいったん破壊しつくされたアテナイは、以後三、四十年の間に焼土から立ち上って前には考え

られなかったような大きな規模に再建された。人間の集団が一つの目標を定めて、もしくは苛酷な必要に迫られて奮闘するとき、驚くべき離れ技をやつてのけることがある。今から三十数年前の全くの焼野原から高層ビルが林立する今日の東京を築いた現代の日本人はアテナイのみごとな物質的再建がいかにして可能であったかを、自らの実績から類推することができよう。未曾有の経済的繁栄を二つの戦後が共通に享受したことはたしかである。(ただし、ペルシアとの戦いに勝った古代アテナイの戦後と戦いに敗れた現代日本の戦後の間には精神と文化の面において雲泥の相違があるが、これは本稿で深入りすべき問題ではない。)

今やヘラス世界の諸都市国家の押しも押されもしない指導国家となった戦後のアテナイは、トインビーのいわゆる「打撃の刺戟」を受けて立ち上り、諸文明の歴史のなかの、もっとも花々しい時代の一つを創造した。われわれがギリシア文化というとき、実はわれわれはこの時代のアテナイが生み出した政治制度、文学、彫刻、建築、哲学、科学などの総合体をさしているのである。現在ギリシアがおびただしい数の観光客を欧米諸国や日本からひきつけているのも、この偉大な時代を記念するものがギリシア各地に存在してわれわれの精神をうつからである。この時代がなかったならば、ギリシアは後世のわれわれにとって何物でもないことは明らかだ。

それは政治ではペリクレス(前四九五—四二九)によって代表されるアテナイ民主制の全盛時代であった。ペリクレスはアテナイの制度についてのどのような意識を持っていたか。ペロポネソス戦争が始まった直後の前四三一年から四三〇年にかけての冬、ペリクレスは戦死者の追悼演説をおこない、そのなかでスパルタの全体主義を批判しつつ次のような言葉でアテナイの制度を称讚した。すなわち、「われわれのおこなう政治を民主主義という。なんとなれば、われわれの主権は少数の特権階級の人々のものではなく、われわれ市民自身的手中に握られているからである。個人

間の紛争を解決する場合に、われわれは、万人みな法の前に平等の権利を有しているのであるという前提に基づいて行なう。ある人物を社会的に責任ある地位につく人として選出する場合、問題とすべきものは当人の能力であり、決して門閥などではない……」(トウキェディウス「ペロポネソス戦争の歴史」第二卷三七節)。それは二十世紀中葉の冷戦に際してアメリカがソ連の全体主義を批判しつつおこなった自画自讃のレトリックとすこしも違わない。

ペリクレス時代にはまた彫刻家・建築家フェイディアス(前四九〇—四三〇)やプラクシテレスが活躍した。ことにフェイディアスは友人であったペリクレスの委嘱を受けて今なおアクロポリスの丘を飾っている端正、荘重、堂々たる大理石の神殿パルテノンの再建に当った。パルテノンはドリス式神殿とイオニア式建築を合体させて古典ギリシア建築を完成させたところに大きな意味があるとされている。

焼土と化したアテナイの再建を指導したフェイディアスは、一六六六年の大火で五分の四を焼失したロンドンの再建を委嘱され、セント・ポール大寺院その他多くの教会や建造物を設計してその名を不朽にしているクリストファー・レン(一六三二—一七二二)と同じく、その才能を十分に發揮する機会を与えられたという意味で、きわめて幸運な芸術家であったと言いうことができよう。

プラクシテレスの作品やその他この時期の彫刻に、われわれは、型にはまっついて、生硬さを脱していないアルカイック期(古拙期)の作品に比して、いちじるしく柔軟自然な優雅な女神像や力強い男神像、さらには正しいプロポーションの若い男女の躍動的な裸身を見ることが出来る。女神像や男神像はもちろん理想化された人間像であって、若い男女の肉体を讚美する思想はギリシア独自のもので、この思想がルネサンスを通じて西欧文明に吸収され、今日に至るまで西欧美術を貫いている太いたて糸の一つであることをわれわれは知っている。プロポーションの美しい端正、

荘重なバルテノンの神殿を仰ぎ、グロテスクな要素といささかも混えない、力強く健全な男神像や豊麗優雅な女神像を見ると、われわれは、ギリシア的とわれわれが頭のなかで描いているものがそこに敵存し、後代の建築や彫刻の原型になったものが、至る処にころがっているのに気づいて驚く。

古典ギリシアの建築・彫刻の全盛期でもあるペリクレスの時代はまたソクラテス（前四七〇―三九九）、プロタゴラス（前五〇〇―四〇〇頃）、アナクサゴラス（前五〇〇頃―四二八頃）、プラトン（前四二七―三四七）や多数のいわゆるソフィストが活躍した哲学、論理学の時代でもある。神学ではなく人間の人間についての学問である哲学が起ったこととは意味が深い。もちろん、われわれはこのなかに神離れの傾向を見る。また、この時代は歴史の祖と言われるヘロドトス（前四八四頃―四二五頃）とトゥキュディデス（前四六〇―四〇〇頃）を生み、三大悲劇作家、アイスキュロス、ソポクレス、エウリピデスが活躍した時代。さらには古今を通じて最大の諷刺喜劇作家と言われるアリストパネス（前四四五―三八五）を生み出したのもこの時代である。

優れた指導者ペリクレスに統治されたアテナイの三十年間は、ギリシアの黄金時代のもっとも輝かしい時代であった。この頃のアテナイの人口は十五万、ほかに約十一万の奴隷があつて、肉体労働に従事していた（「ライフ人間世界史」第一巻「古代ギリシア」）。すなわち、僅か十五万の人口が僅々四、五十年の短期間内に右に述べたような輝かしい業績を残したのであつて、このような事例は世界史のなかでも空前絶後かもしれない。

しかし、ギリシア文化の最盛期はいっせいに開く春の花のように、繚乱たるものであつたと同時にまことに短命であつた。ペルシアという外部からの脅威を前にして、アテナイとスパルタは一時的に結束したが、ペルシアを撃退すると共にヘラス世界におけるアテナイの優位は動かないものとなり、平和のなかでアテナイの富と力は自動的に増大

するかの如くであった。このアテナイの繁栄を見てスパルタはおだやかではなかった。トゥキュディデスはペロポネソス戦争の原因を、アテナイに対してスパルタがいだくに至った恐怖感であると分析している。要するに、ギリシア世界はアテナイを盟主とする勢力とスパルタを中心とする勢力に分裂し、約三十年（前四三一—四〇四）にわたって戦うことになった。これがトゥキュディデスのいわゆる「ヘラスの大いなる禍の始まり」である。ペロポネソス戦争である。そしてこの戦争が終熄する頃には、ギリシア世界は精神的にも経済的にも荒廃し、アテナイもスパルタも北方に起こったマケドニアに併呑されるのであった。

くり返すようであるが、ペルシアとの戦いが終わったあとの三、四十年が大切だ。これは短いといえは短い、経済的に立ち直り、文化の全盛時代を築き上げるに十分な時間であるともいえよう。実際に古今東西の歴史について言えることがあるが、繁栄期はつねに短いのである。そして繁栄がそれ自身のなかに頹廢をはらむことは不可避のようである。この頹廢ということをも、もうすこし具体的に言うと、利己主義の無法な跳梁ということであろう。このことも戦後三十余年を生きて、経済の未曾有の繁栄とそれが生み出した精神的頹廢を経験している現代日本人にはよく判ることではないだろうか。ギリシアは、この不可避の頹廢のなかに落ちこんでやがて没落してゆくのであるが、このことは稿を改めて論ずることにしたい。

四

もともとギリシアの神々は、人間と同じ形をしていて男性神もあれば女性神もあった。たとえば、キリスト教の唯一神は絵画でどのように表現すべきかについて厄介な神学的問題が起こりうるが、ギリシアの神々が神人同形説（*anthropomorphism*）

thropomorphism)を肯定するものであることは明らかだ。その上、その神々は決して人間の模範にもならない、あるいは人間と少しもちがわない勝手気ままな神々であった。

対ペルシア戦争以前のギリシア人は、そのような神々が人間界に干渉するホメロスの世界を信じていることができたかもしれないが、ひとたび自らの力にめざめ、経済的にある程度の豊かさと平和を実現するや、ギリシアには人間の理性や意志を信頼する一種の神離れともいえるべき現象が起こった。

マラトンの戦いに臨んだミルティアアデスや、サラミス湾の戦いを指導したテミストクレスは、決して神託などをあてにせず、人間の全知力をふりしぼって計画し、できる限りの情報を集めて予測し、敵の弱点をついて勝利をつかんだのだ。この予測と計画性は、生命を投げ出しさえすればそれでよしと考えて倒れて行ったスパルタ王レオニダスと随分異なる生活態度のように思う。われわれは、ミルティアアデスやテミストクレスのなかに近代人を見るような気がする。

プロタゴラスの「人間は万物の尺度である」という考えのなかに、人間中心の考え方のめざめを認めないわけにはゆかない。本来「神が万物の尺度」であるべきであるのに、神ではなく人間が万物の基準になったのであるから、これは歴史的にきわめて重大な、コペルニクスの転回と言わなければならない。神々についての思索(すなわち神学)に代って、ソクラテスを始めとするソフィストの人間による人間についての思索(すなわち哲学)は、このような背景のなかで起こった。そして多くのソフィストが活躍し、ソクラテスやアナクサゴラスが不敬罪のことで死刑に処せられたことは、多様な価値観が生れてギリシアの古い信仰体系が破れ始めたことを物語るものである。

ヨーロッパの中世は信仰の時代と呼ばれる。そこでは神が万物の尺度であり、神の意向にそることがこの世におけ

る人間の正しい生き方であると考えられた。そこでは神あるいは教会を中心に社会が組織され、人間の魂の真に永久的な生活は肉を脱した来世にあると考えられた。したがって、人間の身体は魂を宿すための必要悪視されるほどだった。このことはヨーロッパ中世の教会を飾った宗教画を見れば一目瞭然である。

ところが、神を万物の基準と仰ぐ信仰の時代から人間の時代への推移があった。われわれはこれをヒューマニズムの時代（すなわち人間中心の時代）と呼んだり、ルネサンス時代と呼んだりしている。そして、現在われわれがこの人間中心の時代に生きていることは明らかである。

再三にわたる十字軍は聖地回復という所期の目的を達することはできなかったが、その副産物として十字軍発進の基地になったイタリアの都市国家とオリエント世界とを永く経済的に結びつけることとなった。そして、このオリエント世界との交易によってヴェネチア、ゼノア、フィレンツェなどの繁栄がもたらされた。この経済的繁栄が、十五世紀にイタリアに起こったルネサンスの最大の原動力となったことはたしかだ。種々異なる側面があったにせよ、ペルシアを撃破した後アテナイが東方貿易によって大いに経済的に繁栄した事実と、十字軍後のイタリア都市国家の繁栄を重ね合わせつつ比較することによって、われわれはこの二つの花々しい時代をはるかに広い視野のもとに展望したがってより正しくこの二つの時代の精神をつかむことができるようになるかと考える。ことに、ギリシア美術の古拙期から古典期の推移を、ジオットなどによって代表されるいわゆるラファエル以前の絵画から、人間の肉体をたくましく描くルネサンス期への推移と比較することは有効であると考ええる。

ギリシアにおける人間の時代の時代が突然ペルシアとの戦後に始まったのではなく、その傾向はすでにソロン（前六四〇頃—五六〇頃）による民主主義的改革に現われているし、クセノパネス（前五六〇頃生）はオリュンパスの神々につい

ての従来神話的解釈を斥けて、つぎのように述べている。

「エチオピア人は彼らの神々はだんご鼻で、皮膚は黒いと言ひ、トラキア人は彼らの神々は眼が青く、髪が赤いと
言う。もし牛や馬が手を持ち、彼らの手で描き、あるいは人間がするように芸術的制作をする気になるとすれば、
馬はその神々の姿を馬に似せて描き、牛は牛に似せて描くであろう。また、その神々のからだも彼ら自身のからだ
に似せて造るであろう。」

私は必ずしも近代西欧人が全体的にギリシア人よりも向上しているとは考えないが、このクセノパネスの神々に対する
相対観は近代西欧でさらにきかれる、気がきいてはいるが、深味があるとは言えない発言であるように思う。と
もかく、このような神観が対ペルシア戦争に先立ってすでにギリシアに現われたことは、やがて訪れる神離れの傾向
を予告するものである。

近代西欧の才人たちはしばしば神々をからかつてきた。神々を軽くあしらうことは気がきいてるように思われる
かもしれないが、人間は心のもっとも深いところで神を、もしくは神々を必要としているということを忘れないほう
がよい。浅薄な現代人はよく「神は人間が造つたものである、それゆえ、神は存在しない」と言う。人間は神を必要
とするがゆえに神を造つたと考えられないだろうか。言い換えれば、人間の深い苦境が神を造つたのだ。そして、は
っきりと言へることは、人間はまだその苦境を脱していないということだ。いや、その苦境こそ永久に人間につきま
とう避けることのできない人間の運命であろう。

先きに進む前にギリシアの古い神々、古い神々と人間との関係について二、三述べておきたい。神々が不死であり、
人間が死すべき存在であることは自明である。この違いは絶対であり、ギリシアの神々がどんなに自己中心的な気ま

ぐれな存在であろうとも、不死であることによって人間にとって歯の立たない相手である。

デルポイのアポロンの神殿には「汝自身を知れ」という有名な言葉が刻まれていたという。それは人間に対して与えられた警告で、その意味は死すべき運命にある人間の分際で思い上ってはならないぞという意味だそうだ。人間の分在で思い上ることをヒュブリス（傲慢）と言う。そしてヒュブリスはネメシス（神の怒り）を招くことは必至である。アイスキュロスの「ペルシア人」において海に橋をかけるというクセルクセスのヒュブリスは海神の怒りを招いて彼は破滅の道をたどるのだった。また運命の女神の決定は避けることができないという信仰——ソポクレスの「オイディプス王」の中心テーマはこの信仰である。また祖先の犯した罪が子孫にたるという信仰——アガ멤ノーンの家を襲う悲劇がそれであって、われわれは、アイスキュロスおよびエウリピデスの名作によって、アガ멤ノーンの家を襲う恐ろしいたりを読むことができる。

多神の世界では神々が人間と同じように相互に争っているのであるから、神々の権威もあやしいもので、無神の状態に近いと言えないことはない。ホメロスの人間的英雄たちが最高の美德と考えたものは、敬神ではなくて、勇氣、信義、友情、自尊心といったものであることは興味深い。神々を失い、伝統的な道徳観を徹底的に疑ったヘミングウェイが、個人を窮極的に支えるものは勇氣と自尊心であると言っているが、私はときどきヘミングウェイのなかに孤独なホメロスの英雄の面影を見る。

神々は気まぐれで頼りにならないといっても、神は不死であり、決定的に人事に介入するという点で、人間とは次元を異にする存在であることはたしかだ。しかし、不死であるがゆえに、ホメロスに見られる神々の争いは子供の遊戯もしくは狂言じみたものになる。これに対して祖国のため、もしくは自己の名誉のために生命を賭して戦う人間的

英雄の戦いのほうが悲壮であり、われわれを感動させる力を持つ。不死であるがゆえに、神々には緊張もなければ真剣味もなく、そこに浅薄な動機に基づく嫉妬や反目があるだけであって、死すべき存在であるがゆえに、人間は神々よりも高貴な存在になりうるという逆説が成立するような気がする。

いずれにせよ、マラトン、サラミスに先立つ時代には、ギリシアでは古い神々が批判されることもなく素朴に信じられていたが、対ペルシア戦争後の繁栄のなかで古い神々に対する信仰がゆらぎ、神々の時代に代って人間の時代が到来した経緯が以上によって明らかになったと思う。こうして、本稿の初めで提出した問題、すなわち古いヘレネー像と新しいヘレネー像にはどのような違いがあるかという問いに答えるのに必要な手続きが完了した。

五

そもそもトロイア戦争はいかにして起こったか。トロイアの王子の一人で、美男の評判の高かったパリスがイーデー山中で羊飼をしていたときのことだ。オリュンポスの主神ゼウスの妃として権勢を誇っていたヘラ、智の女神アテナ、それに美の女神アプロディテ（ローマ名はヴィナス）の三女神のうち誰がもっとも美しいかをパリスが判定してもらおうではないかということになった。もっとも美しいと判定された女神に渡すべき黄金のりんごを手にしてパリスがひかえている前に三柱の女神が現われた。ヘラは自分をもっとも美しいと認めるならば、あらゆる富と権力を、アテナは決してまちがいをおこすことのない聡明さを、そしてアプロディテは一人の美女の愛を与えると約束した。パリスは人生のもっとも貴いものは美と愛であるとして、黄金のりんごをアプロディテに与えた。パリスのこの選択が賢明な選択であったかどうかについては、果てしない議論がたたかわされることであるが、パリスの選択にもわれわれを

十分納得させるものがあることはたしかだ。

周知のようにこのエピソードは「パリスの審判」と呼ばれ、ルネサンス以来、多くの名画の画題になっている。そして、そのもっとも有名なものはルーベンス（一五五七—一六四〇）の二つの作品で、一つはロンドンのナショナル・ギャラリー、もう一つはマドリードのプラド美術館を飾っている。それは、成熟した女性の豊満な裸身像で、その甘美さは無類である。ついでながらアプロディテ（ヴィナス）の彫像は古典期、ヘレニズム期を通じて数え切れないほど生産され、ルネサンス以後アプロディテは西欧画家によってくり返し画かれてきた二つの理想の女性像であった。矢代幸雄氏の「随筆 ヴィナス」の巻頭にはギリシアの古典期以来、現代にいたる三十二葉のヴィナスの彫像と画像の写真が掲げられていることを付記しておきたい。もう一度ついでながらであるが、「パリスの審判」の三女神にエリザベス一世を加えて四人の女性を画き、パリスが黄金のりんごを女神ではなく、エリザベス女王に手渡している図を見たことがある。宮廷画家のごますり、ここにきわまれりと言うべきであろうか。

連
右のような次第でパリスはスパルタに赴き、当時ギリシア第一の美女と謳われていたスパルタ王妃ヘレネーに近づき、ヴィナスに助けられてその愛をものにしたのであった。

下 島
ヘレネーの夫スパルタ王メネラオスは、兄アガムノンとはかり、ヘレネーを取りもどすために、アキレウス、オデュッセウス、アイアス、ネストル、その他のギリシアの諸將に呼びかけて大軍をもよおしてトロイアを包囲攻撃することとなった。

九年におよぶ戦いの間、この戦争の原因になってしまったヘレネーとパリスが、トロイアの宮廷で人々から白い眼で見られたことはやむを得ないが、老王プリアモスとトロイアの大黒柱ともいべき勇猛なヘクトルだけは、この悲運の美女にやさしかったという。ヘレネーがパリスに走ったのは、アプロディテがパリスとの約束に基づいてそのように取り計らったのであって、ヘレネーには何の責任もなかった。古い伝説のなかでこの事件はこのように扱われている。そしてトロイアが亡んだとき、ヘレネーはメネラオスに取りもどされてスパルタに帰る。もっともヘレネーは種々の伝説に包まれているが、すくなくとも「オデュッセイア」によれば、ヘレネーはスパルタに帰って幸福にくらしたことになっている。

この罪のないホメロスのヘレネー像と異なるヘレネー像、すなわち対ベルシア戦争後のアテナイの繁栄期を経過して著しく人間中心的な考え方が強くなった時代を反映する、エウリピデスのヘレネー像を彼の名作「トロイアの女たち」によって概観することにしよう。

前四八四年生れのエウリピデスは、サラミス海戦が戦われた紀元前四八〇年に六歳、パルテノンの再建が完成した紀元前四三二年には五十二歳、そしてこれより一年前の紀元前四三一年にはすでにペロポネソス戦争が始まっている。劇作家としての彼の活動は、前四三一年から前四一三年頃となっている。そしてスパルタとの戦いは結着がつかないままに紀元前四〇四年までつづいた(彼の死は前四〇七年)。

こうして見ると、彼はアテナイ古典文化の全盛時代に壮年期を送り、アテナイ文化の全盛期にかげりが見え始めた時期を生きて目撃したのではないかと思う。

彼の生涯については直接的に殆どなにも知られていないが、彼はプロタゴラスと交りがあったとされている。プロ

タゴラスの「人間は万物の尺度」という有名な言葉についてはすでに触れた。彼はまたソクラテスと言葉をかわしたことがあると推定され、さらに彼は「宇宙に秩序を与えるものは人間の精神である」という言葉で有名なアナクサゴラスとも交りがあったとされている。神ではなく、人間の精神が宇宙に秩序を与えるという思想も革命的だ（このところ、エウリマンズ・ライブラリー「エウリピデス作品集」第一巻ジョン・ウォリントンによるイントロダクション参照）。アナクサゴラスとソクラテスが、共に思想的な理由で死刑に遇っていることは、エウリピデスおよびその作品を考える上で見のがすことはできないであろう。

前四一五年に発表された「トロイアの女たち」のテーマは敗戦国の女たちを襲う恐るべき運命の逆転である。エウリピデスがこの作品を書くに至った動機は、前年の紀元前四一六年に起こった「メロス島の大虐殺」であったとされている。トゥキュディデスの「ペロポネソス戦争の歴史」第五卷八四節以下に「メロスの対話」と題する有名なくだりがある。エーゲ海の小島メロスは、アテナイとスパルタの間に立って強く中立を維持することを望んだが、アテナイはこれに満足せず、この島に兵を送って武力でこの島を味方に引き入れようとした。だが、メロス島の住民はこれを拒んだ。アテナイ軍はこの島の成年男子をみな殺しにし、女と子供を奴隷として売った。この事件がアテナイの心ある人々に強いショックを与えたことは容易に想像できる。そして、アテナイ軍によるこの処置は、エウリピデスの作品のなかで、トロイア陥落の後ギリシア側がトロイアの女たちに対してとった処置とすこしも違わない。

六

下 島

さて「トロイアの女たち」のなかで神々がどのように描かれ、ヘレネーがどのように扱われているかを紹介しよう。

戦いが終つてトロイアの男たちは倒れ、女たちは勝者によつて海辺に設けられた収容所に収容されている。ヘレネも捕虜としてそのなかにいる。背景は人影のないトロイアの城壁、そして近くの海上にはギリシア方の船が船出を待っているはず。

この女たちは、側女そばめや奴隸としてくじでギリシアの武将にそれぞれ割り当てられて船に積まれるのである。この劇のクロスは捕虜となつているトロイアの女たち。そして、夫ブリアモス老王や大黒柱ともたのんだ息子のヘクトルを失い、すべてを失つたヘカベ女王が始めから終りまで舞台にあつて、泣き、わめき、叫ぶのである。あわれなクロスの歌声とこの老女の絶望的なげきとうらみが、この劇全体の基調になつている。パリスは、もちろんすでになく、この劇の始まるところで王女ポリュクセネが、アキレウスの墓前で犠牲いけにえとして若い命を奪われたことが知らされる。アポロンに仕えて予言の能力を持ち、終生処女であることが期待された王女カサンドラは、アガ멤ノンによつて側女として所望され、狂気のように恐ろしいことを口走る。(彼女自身の破滅ならびにアガ멤ノンの家にふりかかる恐ろしい悲劇を予言する) 老いたる女王ヘカベ自身、オデュッセウスののはした女めとしてイタカに送られることがまづまっている。またヘクトルの妻アンドロマケは仇のアキレウスの子ネオムトレモスの側女として望まれている。ヘクトルとの間に生れた幼児は男であるがゆえに成人することを許されず、トロイアの城壁からつき落されて女たちの涙をさそう。美しくて貞節、ひかえめながらしつかりしたアンドロマケは、多分この女性たちのなかでもっとも魅力的な女性として描かれているようだ。

この劇の終りの方で、トロイアの城中に火が放たれて、トロイアは炎々たる猛火に包まれて亡んでゆく。そして女たちは船の方へ引き立てられる。

この作品が書かれたとき、ペロポネソス戦争はすでに始まっていて、スパルタに対する敵意が所々に現われていることも興味深い。たとえば、配属のきまっていないコロスの女たちの歌。

テセウスの国

豊かなアテナイにゆけますよう。

この憎いヘレネーの国、

ニウロタスの川　うず巻くスパルタに

祖国のかたきメネラオスのはしためとして

仕えることだけは免れたい。(二〇七―二二二行)

これは明らかに、エウリピデスのスパルタに対する現在の思いを、遠い過去の事件に託して述べているのであろう。またテセウスの国、すなわちアテナイを称讃することはスパルタに対する反感と共にきわめて自然である。

ヘカベ　「大地を支え、大地を王座となさる尊いもの、それがどのようなものであるか、人智にはとらえがたく、

ゼウスと呼んでよいのか、それとも自然の理または精神と申したらよいのか、わからぬままに祈ります」(八八

二―八八五行)

神に対するこの態度は明らかに伝統的な神観ではなく、人間の理性もしくは自然の理を神と同一視しようとする立場であって、「宇宙に秩序を与えるものは人間の精神である」というアナクサゴラスの言葉を想起起こさざるをえない。神という言葉はあっても、天上におけるその地位はゆらいでいる。

ヘカベ 「おお神々よ——いや今さら神の名を呼ぶ必要があるうか。これまでいく度もその名を呼んで祈ったのに、かつて聴いてくださったことのない神々であるのに」(一二七八—一二八〇行)

というような頼りない神さまになってしまった。そして葬式に対してきわめて現世的な見方が現われている。ヘクトルの遺児のなきがらを葬るとて、

ヘカベ 「みなの方、貧弱な墓ではあるが、葬ってやっておくれ……どれほどさかんな野辺の送りをしたとて、死んだ者の役に立つものでもあるまい。所詮は生き残った者の空しい見栄みえにすぎないのであるから」(一二四五—二五〇行)

冷静な、殆ど現代的なとも言えそうな、生者中心の態度ではないだろうか。もちろん、ギリシアの伝統的な見方は、死後の世界はハーデスが支配する冥界もしくは死者の国である。それはうす暗い曖昧模糊たる世界で、キリスト教徒の天国、地獄といった明確な世界ではない。それにしても、ヘカベのこの葬儀観は、ギリシア悲劇のなかできわめて重要視されている厳格な葬儀観と鋭い対照をなしている。そして、われわれはここにも人間中心、生者中心の思想の表われを見ないわけにはゆかない。

ホメロスの世界ではヘレネーの責任が問われたことはないが、エウリピデスの「トロイアの女たち」のなかで、ヘレネーは責任を問われ、非難攻撃にさらされる。すなわち、彼女はパリスの美貌にひかれた多情な女として描かれ、彼女ゆえにトロイアは亡びたのであるから、トロイアの女たちがヘレネーを憎むのは当然だ。

クロス 「ああ悲運のトロイアよ、ただひとりの女とそのいまわしい愛欲のゆえに、幾万の尊い生命を失ったことか」
(七七九—七八〇行)

カサンドラ「……まことに憎みても余りある女のために、かけがえのない宝を失ったも同然、それも心にもなくかどわかされたというのであるならば、いざ知らず、自ら進んで不義を犯した女ゆえとは」(二七〇—二七三行)

ヘレネーはこのようにみだらな女として攻撃されている。しかし、この劇のもっとも緊張した場面は、メネラオスとヘレネーとの対決およびヘカベとヘレネーとの対決であろう。当然のことながらメネラオスの憤怒は今ほ亡きパリスに向けられていた。「おれがトロイアに参ったのは、みなの思っているように一人の女のためではなく、客人の仁義をふみにじり、わが家から妻を奪って行ったあの不徳義な男をこらしめるためであった」(八六三—八六五行)。しかし、メネラオスの怒りはヘレネーにも向けられていて、ヘレネーを収容所から引きずり出すようにと部下に命じる。それを見て、

ヘカベ「そなたの妻を成敗しようというのは見上げたお心じゃが、その女の顔を見ぬがよい。見れば、恋しさに惹かれますぞ。その女の美しい顔は男心をとらえ、国を亡ぼし、家を焼かねばやまぬ恐ろしい魔力を持っている」(八九〇—八九五行)

おもしろいのは、ヘカベやメネラオスの攻撃に対して、ヘレネーが「パリスの審判」のエピソードを持ち出して自分を弁護しているところである。すなわち、「パリスが三女神のご器量を品定めする判者になり……アプロディテは私の容姿をほめそやした上、美しさで他のお二方、すなわちヘラとアテナを凌ぐと判定するならば、私の身体をパリスに与えようと約束なされたのです」(九二〇—九三〇行)

すべてが神のはからいで起こったことで、自分には責任はないとヘレネーは言い張る。すると、ヘカベは「ゼウス

の妃であられるヘラともあろう方がそれほどまでに自分の容姿の美しさを求める必要があったらうか。結婚をいとい、一生を処女でいることを父神に願って、その願いがかなえられたアテナがいったいどんな必要があって美しさを認めてもらいたいのか。自分の犯した過失をごまかすために女神を愚か者に仕立てるようなことはなりませぬぞ」(九七五—九八〇行)ときっぱり「パリスの審判」を否定し、「伴はたぐいまれな美貌の持主であったから……スパルタで貧しく暮らしていたそなたは見なれない豪華な衣裳と黄金の飾りに輝くパリスの姿を見るや、たちまち心はまどい、スパルタを棄てて、この黄金にあふれるトロイアの国に走る気になったのじゃ」(九八六—九九三行)と攻め立てる。すなわち、たぐいまれな美女ヘレネーがトロイアに走ったのは、パリスの美貌とトロイアにあふれんばかりの黄金にひかれたからであったというのが、エウリピデス描くところのトロイアの女たちの目にうつるヘレネー像である。

所詮ヘレネーは神話のなかで光り輝く女性、天上の神々の影がうすくなる時、彼女の美がかかるのはやむをえない。彼女は、人間の世界で自分を弁護することが、きわめて困難な立場におかれた女性、その意味で彼女もまた、抜群に美しかったためにアプロディテに目をつけられて、神々の気まぐれな遊びの被害者になった悲運の女性といふべきであらう。

参考書

- Murray, Gilbert: *A History of Ancient Greek Literature.*
Higginbotham, John: *Greek and Latin Literature, A Comparative Study.*
Toynbee, Arnold: *Hellenism, the History of a Civilization.*
Herodotus: *Historias.*

- Thucydides: *The History of the Peloponnesian War*.
Harvey Paul: *The Oxford Companion to Classical Literature*.
アンドレ・ボナール「ギリシア文明史」(人文書院)
高津春繁「ギリシア文学論集」(筑摩書房)
高津春繁「古代ギリシア文学史」(岩波書店)
ホメロス「イリアス」「オデュッセイア」(岩波書店)
「ギリシア悲劇」(筑摩書房)
「ギリシア悲劇全集」(人文書院)
ジャンソン「美術の歴史」(美術出版社)